

体験!

実践!

国際理解実践フォーラム2018

～山形から世界を見てみよう～

報告書



開催日：2018年11月25日(日)

場所：霞城セントラル 大会議室他

主催：公益財団法人山形県国際交流協会 (AIRY)

独立行政法人国際協力機構東北センター (JICA 東北)

認定 NPO 法人 IVY

企画・運営：国際理解実践フォーラム2018 実行委員会

後援：山形県、山形県教育委員会、山形市、山形市教育委員会

山形市国際交流協会

目次

●国際理解実践フォーラム 2018～山形から世界をみてみよう！～当日プログラム	2
●分科会	
第1分科会 地域人材を教室に呼ぼう！～国際理解教育からキャリア教育まで繋がる繋げる地域人材活用術～	4
第2分科会 青年海外協力隊の活動と私の人生	8
第3分科会 世界よ、きてけろ～国際交流員としゃべてみねが？～	14
第4分科会 難民を知るワークショップⅡ～ミャンマー避難民編～	16
第5分科会 国際結婚33年、「移住について考える」～私の人生プラン～	18
第6分科会 山形発！私たち高校生が考えること、できること～これからの世界を語ろう！～	22
第7分科会 世界がもし100人の村だったら～山形から知る世界～	26
●ランチセッション「見た・感じた・考えた 多民族国家ラオス」～JICA エッセイコンテスト2017 研修報告～	
山形県立山形東高等学校 長澤パティ明寿さんによる発表	30
●アンケート集計結果	32

当日プログラム

9:40-10:00	受付 (場所: 霞城セントラル3階 山形市保健センター大会議室前)				
10:00-10:20	オリエンテーション (場所: 霞城セントラル3階 山形市保健センター大会議室)				
10:20-10:30	移動				
	【第1分科会】		【第2分科会】	【第3分科会】	【第4分科会】
10:30-15:30	地域人材を教室に呼ぼう！ ~国際理解教育からキャリア教育まで繋がる繋げる地域人材活用術~ ※第1分科会は、午前午後通しの分科会となります。	10:30-12:30	青年海外協力隊の活動と私の人生	世界よ、きてけろ ~国際交流員としゃべてみねが?~	難民を知る ワークショップⅡ ~ミャンマー難民編~
昼食 休憩 12:30-13:30			【第5分科会】	【第6分科会】	【第7分科会】
		13:30-15:30	国際結婚33年、「移住」について考える ~私の人生プラン~	山形発！ 私たち高校生が考えること、できること ~これからの世界を語ろう!~	世界がもし100人の村だったら ~山形から知る世界~
15:30-16:00	ふりかえり・アンケート記入 (各分科会ごとに行います)				

分科会 テーマ・内容・講師ほか

	地域人材を教室に呼ぼう！ 国際理解教育からキャリア教育まで繋がる繋げる地域人材活用術	渡邊太 (山形市立西小学校/FKG米沢)、舟山康貴 (飯豊少年自然の家)、小笠原直子 (認定NPO法人IVY)、高橋泰行 (JICA東北)、中村絵乃/伊藤容子 (開発教育協会)
第1分科会 10:30-16:00	「子どもたちに世界のことを知ってもらいたい。でも、『教える』だけでは面白くない…。世界と関わりのある人を学校に呼びたい…」 世界を見る窓口に、『地域人材』を活用すると、授業の幅が広がります！ でも「どうやって繋がればいいのかわからない…」、「どんなふうに依頼すればいいのかわからない…」 そんな疑問にズバリお答えします！ また、学校に出向く側の「こんな思いを伝えたい」、受け入れる側の「こんな話をしてほしい」を共有し、地域人材を活用した授業の可能性について話し合います。 <内容> 1. 地域人材を活用した活動を体験してみよう！ (1) 青年海外協力隊経験者の話を聞こう・・・海外での生活や国際協力活動の話から授業に活かせる素材が見つかります。 (2) 地域人材と話そう・・・CIR (国際交流員) や海外における国際協力経験者と、テーマをもとに話し合います。 (テーマ: 「豊かさ」とは?、「私が13歳の頃」はどんなことをしていた?) 2. 地域人材活用の「い・ろ・は」教えます！ (1) 実践事例紹介・・・地域人材を学校に呼び単元や授業で実践した事例の紹介 (2) 地域人材を学校に呼ぶには・・・外部講師 (地域人材) 依頼と調整のポイント	

第2 分科会 10:30 - 12:30	青年海外協力隊の活動と私の人生	笹館宏美・楨正智（山形県青年海外協力協会）
	<p>開発途上国に住み、自分の技術を活かし現地の人々と共に活動する青年海外協力隊。その経験を通して、価値観の変化や進路選択など、その後の人生がどのように進んでいったのでしょうか。前半は協力隊経験者のパネルトーク、後半は医療や教育など、分野ごとに興味があるグループに分かれ、協力隊経験者から直接話を聞き、参加者からの質問にもお答えします。</p> <p>◆パネリスト：沼澤彩子さん（インドネシア派遣／職種：助産師）、中村栄太さん（ネパール派遣／職種：野菜栽培） 司会：楨正智（バヌアツ共和国派遣／職種：小学校教諭）</p>	
第3 分科会 10:30 - 12:30	世界よ、きてけろ ～国際交流員としゃべてみねが？～	山形県国際交流員：キム キョンミン（韓国）、エリカ テルフォード（イギリス）、ミチコ ヨシノ（アメリカ）、王銘雪（中国） 三上英司（山形大学地域教育文化学部教授） 鈴木正和（山形県国際交流室）
	<p>皆さんは国際交流員をご存知ですか？国際交流員はどのような仕事をしているのでしょうか？ワークショップの前半は、県内で活躍している国際交流員の仕事を紹介します。後半は、『2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて海外からたくさんのお客様を受け入れるため、日本（山形）は何をするべきか』を国際交流員と一緒に考えます。まずは国際交流員と楽しく「しゃべて」みましょう！お気軽にご参加ください。</p>	
第4 分科会 10:30 - 12:30	難民を知るワークショップⅡ ～ミャンマー難民編～	安達三千代（認定NPO法人IVY事務局長）
	<p>「難民を知るワークショップ」の第2弾として、実際にバングラデシュで、ロヒンギャ難民支援を行なっているIVYの活動を元にしたワークショップを行います。70万人を超えるイスラム系少数民族であるロヒンギャの人々が、ミャンマーから隣国のバングラデシュへ逃れて1年が経過しました。今や世界最大規模となっている難民キャンプにおいて、何が必要とされているのかを考えていきます。</p>	
第5 分科会 13:30 - 16:00	国際結婚33年、「移住」について考える ～私の人生プラン～	西上紀江子（認定NPO法人IVY） 澤恩嬉（東北文教大学短期大学部准教授） 安孫子義彦・栗野さとみ（山形県国際交流協会）
	<p>1985年、山形県朝日町で、全国に先駆けて行政主導の国際結婚が行われました。以来33年、ステージは第2世代に移りつつあります。国や言語、文化の境を越えて来日し、結婚生活を送ってこられた方々が、ここに住み続ける覚悟をしたのはいつ、どんなことを考えてだったのか。また、迎え入れた町は、どのように取り組んできたのかについて、金山町で暮らす外国出身者と町の担当者にお話を伺い、私たちの今後の人生プランについて考えます。</p> <p>若者から中高年まで、幅広い世代の方のご参加をお待ちしております。</p>	
第6 分科会 13:30 - 16:00	山形発！私たち高校生が考えること、できること ～これからの世界を語ろう！～	阿部真理子（認定NPO法人IVY） 三澤香織（JICA山形デスク）
	<p>山形県には国際協力や多文化共生について取り組んでいる高校があります。前半はポスターセッション形式で参加高校それぞれの取り組みを発表します。後半は高校生、参加者同士で交流タイム！ 高校生や大学生のご参加お待ちしております。</p> <p>◆発表高校とテーマ 山形県立新庄北高等学校「新庄国際化プロジェクト！～新庄で多文化共生を考える～」 山形県立山形東高等学校「山形から世界へ～高校生だからできる国際協力と国際理解～」 「アフリカにおける自然浄化能力などを活用した水質改善の試み」 九里学園高等学校「外国人も住みやすい米沢をつくる」 「国際教育の必要性」</p>	
第7 分科会 13:30 - 16:00	世界がもし100人の村だったら ～山形から知る世界～	チーム100人村：後藤 優子、酒井 悠里、島貫 晶江、酒井 森平（以上山形大学異文化交流コースOGOB）、渡部 詩織（山形大学4年） 三上 英司（山形大学地域教育文化学部教授）
	<p>「世界がもし100人の村だったら」は世界を100人の村に例え、世界を体感するワークショップです。そのワークショップを参考に、山形県と、近年日本に在住する人が急増しているアジアのとある国を取り上げたワークを行います。山形と世界のつながりを体感してみませんか？</p> <p>はじめてワークショップに参加する方、高校生の方、ワークショップに興味はあるけど何をするのかという方の参加をお待ちしています。</p> <p>（このワークショップは開発教育協会「世界がもし100人の村だったら」を参考に制作しました。）</p>	



第1分科会

「地域人材を教室に呼ぼう！～国際理解教育からキャリア教育まで繋がる繋げる地域人材活用術～」


- 担当：渡邊太（山形市立西小学校／FKG 米沢）、阿部真理子/小笠原直子（認定 NPO 法人 IVY）
舟山康貴（飯豊少年自然の家）、高橋泰行（JICA 東北）、三澤香織（JICA 山形デスク）
- 協力者：百瀬美奈子（山形県立鶴岡南高等学校）、中村絵乃/伊藤容子（開発教育協会）
ミチコ・ヨシノ（山形県国際交流員）、ドース・ビンセント/チリムゲ（AIRY サポーター）
- 分科会のねらい・目的：
 - ・国際理解教育で地域人材（リソースパーソン）を活用することの利点や効果を知ってもらう。
 - ・地域人材を、より効果的に、気軽に活用するためのポイントを知ってもらう。
 - ・教員とリソースの意見交流を通して、異文化理解に留まらない地域人材の活用の可能性について探る。
- 参加者人数：16名


1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク： 進行：舟山 康貴	<p>部屋の4隅</p> <p>様々な質問から最後に「地域人材の経験回数は？」という問いで4隅に分かれたところ、「0回」「1回」が多く、複数回経験したことがある参加者は1名という結果になった。その後、グループ作りを行った。担当者（舟山）が太鼓を演奏しながら軽妙な語り口で進行したことで、和やかな雰囲気で分科会を始めることができた。</p> 
ワークショップ 進行：阿部 真理子 パネリスト： 高橋 泰行 （派遣国：ペルー 職種：観光） 小笠原 直子 （派遣国：シリア 職種：幼児教育）	<p>リソースパーソン活用場面を考えよう（青年海外協力隊経験者（以下OV）とのパネルトーク）</p> <p>【学校（授業）で協力隊OVに講演をしてもらおうとしたら、どのようなテーマで話してもらうことができるかを考える。】</p> <p>異文化理解を目的に、派遣先の国の生活や文化の紹介をってもらうケースが多いが、OVが現地で活動する前の意気込みと赴任後の現地でのギャップ、失敗したこと、挫折したこと、そしてそれをどう乗り越えたか等を聞くことで、異文化理解だけではない授業が可能であることに参加者が気付く。</p> <p>① パネルトーク</p> <p>「どのような活動をしてきたか」「価値観が変わったことは」「失敗から学んだことは」などについて話を聞いた。</p> <p>② パネルトークを聞いて、学校（授業）でどのような活用ができそうかをグループで話し合った（付箋紙に書き、模造紙にまとめる）。</p> <p>③ 各グループで話し合われたことを発表。</p> <p>（所感）</p> <p>-青年海外協力隊に応募したきっかけや動機、現地で活動する中でどのような壁にぶつかり、どうやって乗り越えたのか、そこで気づいたこと、どのように価値観が変わったのかなど、個人にフォーカスしてじっくりと話を聞いていった。参加者は、日本との文化や生活様式、</p> 

	<p>人々の感覚の相違点や共通点を考え、様々な気付きが得られたと考えられる。人によって聞く際の視点が違うので、グループで話し合うときにまた新たな気付きが生まれた、今回、2つの国と職種を比較して話を聞いたことも、多くの気付きにつながった。</p> <p>-「幼児教育」や「観光業」というのはどのような仕事なのか、そこで働く人たちがどういったことを考え、どのようなことを大切にしているかが断片的にはあるが話の中に出てきており、協力隊OVの話は、子どもたちが「仕事」や「働くこと」について関心を持つきっかけにもなり「キャリア教育」にも繋がっていくと感じた。</p>
<p>実践事例紹介 進行：渡邊 太</p> <p>(午前の部終了)</p>	<p><u>初級編：渡邊（山形市立西小学校）より、比較的簡単に依頼できる内容の実践事例紹介</u></p> <p>-異文化理解を目的に JICA や国際交流員（GIR）へ出前講座を依頼し派遣先の国の生活や文化の紹介をしてもらおうと、学校での出前授業の経験も豊富なので、事前の打合せも比較的簡単にできるため、依頼しやすい。</p> <p><u>上級編：百瀬美奈子教諭（山形県立鶴岡南高校）の実践紹介と質疑応答</u></p> <p>-リソースパーソンである協力隊OV（派遣国：ルワンダ、職種：小学校教育）やIVY（イラクにおける難民支援、カンボジア算数教育支援）の話は、英語の単元で扱った内容が生徒に説得力を持って受け入れられることにつながり、意識も高くなった。活動者から直接話を聞くことで学びが深まると同時に自分に引きつけて考えることにつながり、そこから今までとは違った目標に向かっていく姿が、生徒たちの感想からも読み取れた。</p> <p>-そういった学びを生み出すためには、教師の「繋ぐ力」が重要だということも改めて感じた。リソースパーソンに学校に来てもらい、授業をしてもらう前に、下地となる基礎情報に触れておくといった細部の繋ぎだけでなく、「英語探求」という学校設定科目のなかで、今の世界やこれから自分たちが切り開く未来といった大きなテーマを、より具体的に捉えることができるように授業を組むこと、テキストだけでなく複数のリソースパーソンという生きた教材を活用することが必要である。「様々な問題」を繋ぎ合わせ、多面的に捉え、さらには同じ「人」として「今の自分、未来の自分」をも重ね合わせられるような大きな繋がり仕組みを生み出す力が求められる。</p> <p>(所感)</p> <p>細部を大切にしながらも大きな繋がり仕組みを生み出す力=資質を教員が持つためには、「常にアンテナを高くすること」「人と関わりつながることを楽しむこと」「その道に詳しい人を想像し、直接コミュニケーションをとる行動力を大事にすること」などが大切だという百瀬先生の言葉が大きなヒントとなったと思う。</p>
<p>リソースアピール タイム</p>	<p><u>リソースアピールタイム</u></p> <p>JICA：高橋泰行、IVY：小笠原直子、GIR：ヨシノ・ミチコさん、AIRY サポーター：ドース・ビンセントさん、チリムゲさん、それぞれに「学校でどんな活動をしてきたか、こんなこともできます、やってみたいです」という話をしてもらった。</p> <p>(所感)</p> <p>団体情報を一覧にまとめた資料を作成し、配布しただけなく、リソースパーソンが並んで一人ずつ話をしていくことで、こういったリソースパーソンがいるのだということ(どのリソー</p>



	<p>スが何を得意にしているのか)を端的に分かりやすく知ってもらうができた。</p> <p>特に、ミチコさんやビンセントさん、チリムゲさんといった ALT 以外のリソースパーソンとして活用できる外国の方と教員が繋がる機会というのは多くないので、貴重な出会いの場になった。</p>
<p>リソース活用体験</p> <p>リソースパーソン： ヨシノ・ミチコ ドース・ビンセント チリムゲ 楨 正智 大沼 文香</p>	<p><u>リソース活用体験（テーマトーク）</u></p> <p>グループワークで、リソースパーソンを中心に、参加者それぞれが以下 2 つのテーマについて話した。</p> <p>テーマ①「あなたにとっての豊かさとは？」</p> <p>テーマ②「13 歳のときの私」</p> <p>どちらのテーマも、その人からしか聞けない話を聞くことができ、参加者は興味深さそうに耳を傾けていた。</p> <p>（所感）</p> <p>話される内容は個人的なことなのだが、そこからそれぞれの国の文化や人々の価値観の違いなどに気づくことがあった。また、参加者自身も自分の話をしたことで、教える／教えられるといった関係性ではなく、経験を共有するといったよりフラットな立場で話を聞き、リソースパーソンやその語られる話をより身近に感じながら聞くことができた。</p> 
<p>ワークショップ 講師：伊藤 容子 (DEAR)</p>	<p><u>今回の分科会からの学びや気づきの共有</u></p> <p>グループワークと全体共有で今回の分科会で得られた気づきや学びをふりかえった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現地のニーズの把握が大切。 ・ 年齢や経歴の違いによって、同じ山形の人でも違う。 ・ 国際理解を通して『いじめ』について考えるきっかけになった。 ・ 異年齢、異職業で話すことで気づきがあったが、学校ではそういった場面が少ない。 <p>以上、様々な気づきを共有することができた。</p>
<p>ワークショップ 進行：小笠原 直子</p>	<p><u>リソース活用の心得</u></p> <p>リソース側からの視点として、リソースパーソンを依頼するときのポイントを下記紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 丸投げはせずに、教師も意図（どういった話をしてほしいのか、子どもたちにどんなことに気づいてほしいか、考えてほしいか）をもってリソースパーソンを活用した方が、効果的な活用となる。 ・ どんな生徒たちなのか、前後の授業（単元構成、目標）についても伝えてもらえると、リソースパーソン側もイメージが湧き、話題や資料の準備がしやすくなる。 ・ リソースパーソンを知ることによって、総合だけでなく、道徳やその他の教科など様々な場面での活用ができる。 <p>教師側の視点として、「『子どもたち』に何を学ばせたいか、考えさせたいかという視点だけでなく、一人一人の『子ども』の興味・関心にマッチングするという視点を持つことで、リソースパーソンにどんなことについて話してもらうのが具体的に見えてくるのではないか」ということを伝えた。</p>

<p>ふりかえり・お茶会</p>	<p>名刺交換会</p> <p>昼食休憩のときに参加者に簡単な名刺（名前と所属など）を作ってもらい、今回、参加していただいたリソースパーソンにも名刺を準備してもらい、名刺交換を行った。</p> <p>（所感）</p> <p>午前と午後でメンバーを替えてグループワークをしたことで、リソースパーソンを身近に感じてもらえたようで、積極的に話しかけている参加者が多かった。分科会の中だけでは、繋がりを持つまでは難しいので、今回の名刺交換会が、繋がりをつくる小さなきっかけになったようだった。</p> 
------------------	---

2. 参加者アンケート

- ・地域人材を教室に呼ぶことの成果を実感することができました。楽しかったです。
- ・具体的な実践や海外での経験を聞くことができ、学校に国際理解の風を吹かせるイメージができました。
- ・自分が知っている人だけではなく、知らない人と意見を交えることで、より新たな考え方を知ることができました。外国の方と学校のこと以外で話すのは初めてだったので日本の外を身近に感じることができて本当によい機会になったと思います。
- ・異年齢、異職種の方々と国際理解について自分しか見えない一面ではなく、様々な角度から考えることができ、楽しかったし、より深く考えていかなければいけないと感じた。来年またこのようなフォーラムに学校の仲間を誘って参加したいと感じた。

3. 担当者所感

【ファシリテーター：渡邊 太（山形市立西小学校／FKG 米沢）】

今回は、様々なセッションやワークショップを組んだことで、学校でのリソースパーソン活用の可能性をいろいろな角度から切り取ることができたと思う。特に、IVYやCIR、AIRYといった組織というよりも個人にフォーカスしたことで、リソースパーソンを活用することの良さを、体験を通して実感できるような分科会になった。参加者が「面白い」と感じたことが、「学校でやってみたい」「子どもたちにも経験させたい」に繋がるので、良いきっかけづくりの場になったと思う。

<良かった点>

- ・参加者の満足度が高くなった要因として、グループファシリテーターの存在が大きかった。分科会の主旨を理解した上で、グループのメンバーから意見を引き出す役割を担ってもらえたので、参加者同士の話し合いが促進された。
- ・対象と考えていた教員の参加は少なかったが、高校生や一般の方々の参加もあり、世代や職種を超えたグループワークができたことで、結果的に様々な意見や経験談が聞けたのがよかった。
- ・こういった様々な立場の人が集まって、1つのテーマについて自分の考えや経験を話す機会は普段あまりないが、今回世代のギャップがある中で「持続可能な豊かな社会」について議論を行い、お互いの「豊かさ」に対する視点の違いを知る機会となった。
- ・参加者が少なかった分、リソースパーソンとの距離が近く、彼らの魅力を直接感じる場となったことはとても有意義だった。

<改善すべき点>

- ・分科会のチラシも作成して広報を行なったが、教員の参加者が少なかったのは課題として残った。次回へ向けてテーマ設定、広報共に検討が必要である。



第2分科会

「青年海外協力隊活動と私の人生」

●担当：榎正智、笹館宏美

●協力者：沼澤彩子（インドネシア派遣／助産師）、中村栄太（ネパール派遣／野菜栽培）、白幡祐子（ニカラグア派遣／作業療法士）、大沼文香（ニカラグア派遣／青少年活動）、長澤恒平（グアテマラ派遣／感染症対策）

※全て所属は「特定非営利活動法人山形県青年海外協力協会」

●分科会のねらい・目的：

- ・青年海外協力隊への参加動機と任国での活動内容を紹介するとともに帰国して感じたことを参加者に知ってもらう。
- ・ボランティア経験を仕事やプライベートでどの様に活かしているのか、また活かされているのか等を参加者に知ってもらう。

●参加者人数：30名

1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク ファシリテーター： 榎正智	<p><u>アイスブレイク 1：架空の国での挨拶</u></p> <p>架空の国での挨拶を4種類紹介し、司会者の合図をもとに参加者同士が様々な順番で挨拶をして回る。（①お早うございます、②名前、③どこから来たのか、④ハイタッチ）</p> <p><u>アイスブレイク 2：言葉の意味クイズ（部屋の四隅）</u></p> <p>パネリストに、それぞれネパール語・インドネシア語で、あるフレーズを言ってもらい、その意味を参加者に四択で考えてもらう。</p> <p>（Q1：貴方は結婚していますか？ Q2 貴方の恋人の名前は何か？）</p>
パネルトーク 進行：榎正智	<p>パネリスト：沼澤彩子さん（インドネシア派遣/助産師） 中村栄太さん（ネパール派遣/野菜栽培）</p> <p>パネルトークに先立ち、司会者が JICA 青年海外協力隊と山形県青年海外協力協会の概要を簡単に紹介。</p> <p>司会者の進行のもと、以下のテーマで、パネルトーク形式で語ってもらう。</p> <p>① <u>帰国して驚いたことはありますか？（逆カルチャーショック）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・沼澤：帰国直後に新宿にて昼食を取った際、パスター皿の値段が千円と高く、かつ一人で食事をしている人が多かったこと。任地では1週間（の生活費が）250円で過ごすことができ、また一人で食事をとることはなく見知らぬ人でも一緒に食べようと声をかけてくれた。 ・中村：東京でインターネットを使おうとカフェに入ったら、Wifi が無く不便な思いをしたこと。ネパールでは何処のカフェにも Wifi があったので、ネパールの方が先進的と感じる。 日本は、技術は進んでいるがテクノロジーの導入は遅れているのかも、と感じた。 ・沼澤：インドネシアでもカフェに行くと、フリーWifi が飛んでいるので、外国の人と簡単に連絡を取り合うことが出来た。（日本ではそれが難しい。）



② 協力隊参加の動機は何ですか？

- ・沼澤：以前、開発途上国で医療支援をする医師の話聞いたことがきっかけ。病院に勤務し6年経った頃、「一通りの仕事が出来ようになり、こなしているという様な感覚で仕事をしてよいのか」と感じる様になっていった。
カンボジアを旅行し、孤児院で出会った子どもたちと触れ合い、自分が育ってきた環境が当たり前ではなかったことに触発され、開発途上国の人々の為に何か出来ないかと思ったから。
- ・中村：農業分野の青年海外協力隊を多く出している大学だったが、学生当時は協力隊に興味は無く、むしろ日本の農業の方が、問題があると思い、福島で農業関連の会社に7年間勤務した。東日本大震災を機に、「人の為に働きたい」と福島に来る人と、営業職の自分とにギャップを感じ、「何か貢献したい」と思った時に協力隊を思いついた。

③ 任地の様子と活動内容について（スライド写真を交えての紹介）

- ・沼澤：任地はエビの養殖地のある田舎で、高床式の住居。活動内容は、出産で亡くなる母子の原因追及と、解決策を考えることだった。



活動の様子（左：中村氏、右：沼澤氏）

- ・中村：任地は首都からバスで2時間程の、野菜の大産地。活動内容は、（農家に対して）化学肥料や農薬使用の正しい知識を普及させることだった。

④ 配属先に実際に派遣された時、どのような様子だったか？

- ・沼澤：派遣当初は「日本人が来た！」という珍しさで騒がれ、「何だか楽しい」という雰囲気があった。しかし（措置を施すことで助かる命があることに対して）、「人が死ぬことは神様が決めること」という現地の人々の価値観と、要請を受けた側（自分）とで問題意識の差を感じた。
- ・中村：任地は何代にも渡り隊員が派遣されていたので、受け入れ側が日本人に慣れており「やりたい事をやっていいよ」と言われた。任期終了の1年前からネパールの体制が変わったことにより、配属先がなくなるかもしれないという、不安定な状況に置かれた。
- ・司会者：派遣時の要請内容が、任地に着いてみると変わっているというのは多々あり、自ら問題を見つけ活動することがある。

⑤ 具体的な活動内容と問題をどの様に乗り越えたのか（写真を交えての紹介）

- ・沼澤：任地は新生児が多く亡くなる地域。うぶ声があげられない赤ちゃんは、呼吸が始められないので、日本ではすぐに蘇生処置を行う。任地の助産師は「やったことがない。聞いたことはあるがわからない」と病院に赤ちゃんを運ぶが、その間に赤ちゃんは亡くなってしまう。最初の頃は「日本だったら…（助けられるのに）。なんで！」と葛藤があった。しかし、命を救いたいという気持ちは一緒に、相手を否定するのではなく、自分の考えを一旦壊し、インドネシアの文化・生活習慣や置かれた状況を丸ごと

受容し、コミュニケーションをとる努力を重ねた結果、信頼関係が生まれ本音で語りあえるようになった。最後には、心肺蘇生の練習も、現地の人同士で教えられる様になった。

- ・司会者：2年間という限られた時間で、「私たちが出来ること」は、私たちが帰っても現地の方々だけでできるような環境にする、ということですね。
- ・中村：住民や農家の人々とのコミュニケーションや信頼関係がないと、いくら正しい情報やデータを示しても「分かった、分かった。」と言われるだけで、納得してもらえない。そこで、会議の時は必ず時間前に行くようにしたり、農業とは関係の無い場所にも顔を出したりとしていくことによって、名前を憶えてもらうようにした。1年に1回作物を作るので、1年目には観察し、2年目にトライ（活動）をした。

⑥ 帰国した現在、何をしているのか、何を活かしているのか？

- ・沼澤：看護学生、助産学生の実習指導をしている。お産のプロセスは世界共通だが日本で出産が原因で母子が亡くなるのは少なく、世界の中でもトップレベル。その差は何かと考えると、助産師の観察力や次のケアを考えるトレーニングを受けているからだと分かった。そこで、医療従事者が育ってゆく過程を学びたいと思った。学生には、「皆さんはたまたま日本に生まれ、日本の教育を受けられるけど、十分な教育を受けることの出来ない国や地域があるよ」と話をしている。
- ・中村：福島県田村市で復興支援員として働いている。田村市は、2020年の東京オリ・パラリンピックのネパールのホストタウンとなっており、高校生に（ネパールに関する）授業をしたり高齢者にヒアリングをしたりと市の活性化の為に働いている。公務員を目指しているの、次のキャリアへの準備期間でもある。


⑦ 協力隊に参加したからこそ、広がった価値観はあったか？

- ・沼澤：雨季で助産所が床下浸水しても、皆笑顔で記念写真を撮った。「人生楽しまなきゃ損」という感覚を教わった。人生観がシンプルにそぎ落とされた。日本にいる時は、先のことや不安でしがらみでガチガチになっていたが、この命を生きている間にどう使うか、心の声に従ってやってみようと思っている。
- ・中村：これから先が不安ではあるが、協力隊に参加したことに後悔はしていない。安定した仕事への疑問は、帰国した今も感じている。会社員ではない生き方も良く型にハマらない生き方を選択しても間違いではないと思っている。
- ・司会者：最終的に大切なのは、人とのコミュニケーションや、人生を楽しむリフレッシュする心をもっていること。違う世界に行ったら、狭い世界で考えず、視野を上手に広げて生きてみよう。



協力隊経験者
自己紹介

- パネリスト以外の各協力隊経験者から職種・任国を紹介。
- ・白幡 祐子さん（ニカラグア派遣/作業療法士）
 - ・大沼 文香さん（ニカラグア派遣/青少年活動）

	<ul style="list-style-type: none"> ・長澤 恒平さん（グアテマラ派遣/感染症対策）
<p>グループトーク</p>	<p>参加者に興味のある各協力隊経験者のテーブル（6テーブル）に移動してもらう。各協力隊経験者よりそれぞれの国事情や職業ならではのエピソード、今後ボランティア経験をどう活かしたいか等を発表してもらい、その後参加者より自由に質疑応答を行った。</p> <p>*発表項目：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協力隊参加の動機 ・活動内容（良かったこと、楽しかったこと、辛かったこと、エピソード等） ・帰国後、価値観がどう変わったか。自分自身の変化。 ・現在の仕事、なぜこの仕事を選んだのか。 ・これからの人生をどのように生きていきたいのか。 
<p>全体会・まとめ</p> <p>ファシリテーター： 笹館 宏美</p>	<p><u>全体会・まとめ</u></p> <p>① <u>各グループの話の内容を、参加者代表から紹介</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ1（沼澤彩子さん/インドネシア/助産師） 写真や母子手帳・道具などを見せてもらいながら、インドネシアでの活動や食事・住居等の話を聞いた。「この村でお世話になります」という気持ちで、現地の人に助けられて活動した。 ・グループ2（中村栄太さん/ネパール/野菜栽培） カースト制が残っている中でも人々は幸せに暮らしている。ネパールでは、若者が自国の文化や宗教・習慣等を守る努力をしている。 ・グループ3（槇正智さん/バヌアツ/小学校教諭） 小学校で体育の授業を担当。スポーツ大会を企画し、それが翌年にも開催された。言葉の壁は、簡単なコトバで乗り越える。コミュニケーションを取ることで、問題発見とその解決に繋がった。日本との違いや良さを実感した。 ・グループ4（白幡祐子さん/ニカラグア/作業療法士） 作業療法士として技術を伝えるという要請だったが、実際に人と接する中で、子どもたちの自立と開発途上国ならではの事をしようと考えた。日常生活で家族がどのように障害をもつ子ども達と接していくかということ伝えるように心掛け、家族に向けた研修会を実施した。また、集団療法として園芸活動を提案し、現地にある資源を用いて導入したことで、自分が帰国した後も継続出来た。集団に伝えることの限界があったので、個々の家庭を訪問し伝えるようにしたところ、帰国後も出会った学生が自分の活動を継承してくれている。 現地の人はストレートに（物事を）伝えてくる人が多いので、日本人の遠慮しがちな性格も海外では変わるかもしれない。 ・グループ5（長澤恒平さん/グアテマラ/感染症対策） シャーガス病（虫が媒介する病気）対策で派遣。シャーガス病はデング熱のように富裕層もかかる可能性のある熱帯病と違い、貧困層が多く罹患する為、政府の対策が遅れている。活動例としては、「ぬり絵」コンテストで寄生虫を媒介する虫であるサシガメを知ってもらう啓発活動を学校や村で行った。途上国では社会制度や仕組みが未発達な部分が多いため、先進国では見えづらくなっているもの（例えば生と死、ゴミの処理など）がよく見え、自分が置かれている社会を理解するのにとても役に立つと思う。世界（他の国）

に目を向けることは他の国を理解することだけではなく、自国を顧みる良い機会になると思う。

・グループ6(大沼文香さん/ニカラグア/青少年活動)

中国人と間違われて、冷たくされ悲しい思いをすることもあった。共に働いた学童保育の先生達は「手本通り」を目指す、そこに行き着く過程が大事だと伝えることが難しかった。

運動会や絵画コンテストを運営した際、日本文化を取り入れて表彰式を実施。人前で表彰されるという体験が子どもたちには無かったので、皆が達成感を味わった。



② 各協力隊経験者から参加者へのメッセージ「あなたにとっての協力隊とは？」

・沼澤：命は当たり前じゃない。

健康でいられるのは、奇跡の積み重ね。

私たちは生かされている。

・中村：過去に後悔していない。

(協力隊を選んだ) 決断は間違っていない。

・横：人生の扉を開けてくれた経験。沢山の出会いがあり、本来ならタメ口を聞けない様な

方々とも話をすることが出来る。現地でも日本でも何かしら学ぶことが出来る。

やらないで後悔しない様に。

・白幡：新たな自分を発見できる経験。

・長澤：人生のスパイス。辛くもつらくもあり、でも、それが無いと美味しくない。

・大沼：必ず明日が来るわけではない。暴動が起こり、子どもたちに挨拶が出来ないまま帰国してしまったから。今を楽しもう。



2. 参加者アンケート

・実際に現地での暮らし方や活動を聞くことができ、さらに青年海外協力隊への興味が深まった。助産師さんになりたいと思っているので、道具や活動風景を写真で見ることが出来てよかった。大変なことは多いと思うけれど、それ以上に達成感が得られると思った。

・途上国に対して抱いていた感情が変わりました。前から農業について興味をもっていたのですが、より学びたいと思い、それを人のために活かしたいと思いました。

・協力隊に興味があり、協力隊の活動に参加する中でどんな心構えで参加していったらよいかを考えることができました。

3. 担当者所感

【ファシリテーター：笹館宏美（山形県青年海外協力協会）】

今年は昨年以上に中学生2名・高校生18名・大学生5名と10~20歳代の参加者が増え、新しい風と活気を感じる分科会となった。高校生の参加が多かったので、教育や医療関連のテーブルに多くの人が集まるという若干の偏りが出たが、各テーブルともに活発な質疑応答がなされた。

運営ボランティアの大学生から、「一人の協力隊経験者の話を聞くのではなく、6名全員の話聞いてみたかった」という感想も出されたので、次回はゲスト3~4名を迎えたパネルトークで、会場全体からの質疑応答という形も検討してみたい。回を重ねる毎に運営やボランティアさんの動きや協力体制がスムーズになり、充実したフォーラムになっていると思う。ありがとうございました。



第3分科会

「世界よ、きてけろ！ ～国際交流員としゃべてみねが？～」

●担当：三上英司（山形大学地域教育文化学部教授）、鈴木正和（山形県国際交流室）

キム・キョンミン（山形県国際交流員/韓国出身）、エリカ・テルフォード（山形県国際交流員/イギリス出身）

ミチコ・ヨシノ（山形県国際交流員/アメリカ出身）、王茹雪（山形県国際交流員/中国出身）

●分科会のねらい・目的：

- ・国際交流員の活動を知ってもらい、参加者が今後、自分の所属する団体で国際交流員を活用してもらう契機とする。
- ・ワークショップを通し、同じテーマでも国際交流員それぞれで見解が違うことを知り、多様性の理解につなげる。

●参加者人数：34名

1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
国際交流員の自己紹介	<p><u>各国の国際交流員の自己紹介</u></p> <p>・4名の国際交流員が「出身の国と都市」、「趣味」、「好きな食べ物」、「日頃どんな仕事をしているか（翻訳、通訳、小学校・中学校・高校での出前講座、AIRYのイベント企画・運営）」などの話を交え、自己紹介を行った。</p>
<p>ワークショップ</p> <p>ファシリテーター： 三上 英司</p>	<p><u>グループ討議</u></p> <p>【テーマ：「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて海外からたくさんのお客様を受け入れるため、日本（山形）は何をするべきか」】</p> <p>① A, B, C, Dの4グループに分かれ、上記のテーマについてグループ討議を行った。各グループには国際交流員1名が加わり、国際交流員がA→B→C→Dのようにグループを移動することで、1つのグループで合計4回、異なる国際交流員をメンバーに入れて同じテーマについて討議を行った。</p> <p>② 討議で出た各意見は、4名の国際交流員に対応し4色の付箋紙を使い、国際交流員との討議の中で感じた意見を各グループの模造紙に張り付けていった。</p> <p>③ グループでそれぞれ作成した4種類の意見を掲示し、他グループのものと比較した。グループ討議に国際交流員が入れ替わり参加し、同じテーマについての討議を行った結果、海外からお客様を受け入れるにあたっての山形の強みや課題、その対応策に関し、同じような意見が出た一方で、グループに入った国際交流員により異なる意見が導き出される例もあった。</p> <p>《国際交流員による違いがなかったもの（共通意見）》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公共交通機関の利便性をもっとよくする。 ・キャッシュレス、ICカードが使える場所を増やす。 ・外国語表記の看板を増やす。 ・SNSでの情報発信。 ・Wi-Fi環境の整備 など。



	<p>《国際交流員によって違う結果となったもの》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「温泉をもっとPRすべき」、その一方で、「温泉ばかりPRされても、温泉に入る文化がない国もある。そうした国の人への理解も必要。」との意見もあった。 ・山形の観光における強み、力を入れるべきものについて、「日本酒」、「歴史」、「見るだけではない、体験型の観光」、「外国人向けの観光ツアー」、「宗教の違いに対応する」など、グループに入った国際交流員それぞれの違った視点からの提案があった。
<p>まとめ</p> <p>ファシリテーター： 三上 英司</p>	<p>まとめ</p> <p>国際交流員がそれぞれ討議の中で印象に残ったことを発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外国の方から山形に来てもらうためにアピールするものとして、「山形を舞台とした映画やドラマなど」が活用できる。 ・東京のアンテナショップを活用した山形県の情報発信や、熱心な観光ボランティアを活用すべき。 ・東京オリンピック・パラリンピックはスタートであり、オリ・パラリンピック終了後に来県するリピーターの獲得が大切。 ・東京や大阪、京都に来た外国人観光客に来日の2回目以降に山形に来てもらうため、まずは関東圏、関西圏の日本人に山形の魅力を知ってもらうことが必要。 ・最後に、ファシリテーターから、「4名の国際交流員が印象に残ったことはそれぞれ違う。さらに国際交流員はA,B,C,Dと4つのテーブルを回り、それぞれのテーブルで同じ内容の意見を言おうと準備していたが、テーブルを回る中で自分の話す内容も変わっていった。人と人とが『交流』するということは、お互いに話し合うことによって自分自身のものの見方が変わっていく、気が変わっていく、ということ。今回のワークショップそれを体験していただけたと思う。」と締めくくり、まとめとした。

2. 参加者アンケート

- ・国際交流員の方4名とそれぞれお話できたのがよかった。一人ひとり考え方が違うのでお話を聞いていて、興味深かった。
- ・日本人では分からない、他国と比較したときの視点を聞くことができた。自分も視野を広げ、より多角的な視点から物事を見ることができるようになりたい。そして世界を理解したい。
- ・国際交流員と話してみて、外国の人から見た日本や山形の素晴らしいところ、改善点などを知ることができ貴重な機会だった。特に新鮮だったのは2回目以上の旅行者を対象にするという点でオリンピック・パラリンピックがスタートであるという話に現実味があり、よいと思った。
- ・グループワークをするなかで、国によっても全く考え方が違うということが発見できた。山形の魅力と山形への導線づくりが改めて必要だと感じた。

3. 担当者所感

【鈴木正和（山形県国際交流室）】

サブテーマ「国際交流員としゃべてみねが？」のとおり、参加者から国際交流員と気軽に話してもらい、国際交流員の活動を知ってもらうという目的は概ね達成できたと思う。

ワークショップのテーマを「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて海外からたくさんのお客様を受け入れるため、日本（山形）は何をするべきか」という、参加者が興味を持って参加できそうなものにしたため、活発な討議が行われた。ワークショップを通して国際交流員それぞれの考えの違い、そこから導き出される多様性についても参加者から感じてもらったと思う。今回は高校生の参加者が多かったが、参加者からの口コミなどで、国際交流員の活動について多くの方に知ってもらい、活用につなげていければよいと思う。



第4分科会

「難民を知るワークショップ II～ミャンマー避難民編～」

●担当：安達三千代（認定NPO法人IVY）、佐藤佑香（IVYyouth、山形大学）

●分科会のねらい・目的：


- ・一人でも多くの方々に、ミャンマーからバングラデシュへ逃れているミャンマー避難民（ロヒンギャ難民）の実情を知ってもらうため、バングラデシュの難民キャンプで支援を行っているIVYがワークショップを作成した。
- ・難民キャンプの現状や課題を知り、IVYが行っている難民支援をはじめ、国連などが行っている支援についても知ってもらう。

●参加者人数：32名

1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
アイスブレイク	<p><u>グループに分かれて自己紹介</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者を7グループに分け、自己紹介をして頂いた。これからロールプレイで家族となるため、自己紹介を通じて参加者同士打ち解けてもらった。
<p>グループワーク ファシリテーター： 安達 三千代</p>	<p><u>難民の定義に関するクイズ</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・難民条約の難民に関する定義の文から穴埋めクイズを行い、「難民とはどのような人なのか」を知ってもらった。 ・条約難民、環境難民、経済難民、国内避難民など9つの「難民」に似た状況の選択肢の中から、どれが「条約難民」なのかをクイズにした。 <p><u>写真並べ替え「ミャンマーから逃げるか、とどまるか」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・5枚の写真を使って「ミャンマーからバングラデシュへ逃れるまでの過程」を考え、写真を並べ替えてもらった。参加者たちは写真の状況や写っている人々の服装、表情などを見ながら、どんな場面なのか想像しながら写真を並べ替えていた。
	<p><u>ロールプレイ「バングラデシュへ」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミャンマー軍の掃討作戦により村から逃れた家族が、バングラデシュへ逃れるために国境ゲートで難民申請書に記入し、難民キャンプにたどり着くまでを体験してもらった。 ・参加者は、難民登録申請書にどんなことを書いたらよいか戸惑う姿もあったが、家族で相談しながら申請書を書きあげ、無事に難民登録証を受け取り、難民キャンプへ入ることができた。難民になるためには登録が必要なことを初めて知った方もいた。



	<p><u>ロールプレイ「難民キャンプでの生活」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・7枚の難民キャンプの写真を見ながら、これから各家族が暮らすキャンプ内の様子を知ってもらった。住居、学校などの施設が写った写真を見ながら、「学校もあるんだね」「食べ物はどうやって手に入れているのかな」など、疑問も浮かんでいる様子だった。 ・キャンプ生活3ヶ月目、雨季に入ったバングラデシュでは大雨や台風により、住民の生活にも影響が出始めていた。各家族には4枚の写真を見ながら、キャンプ内でどのような問題が起きているのか考えてもらった。 <p><u>ロールプレイ「進路のジレンマ～キャンプにとどまる？出ていく？～」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャンプ内で「かわら版」が配られ、難民キャンプの外で暮らす選択肢もあることがわかった。そこで各家族に、「かわら版」も参考にしながら、キャンプにとどまるか、キャンプを出ていくかを相談してもらった。 ・これまでのキャンプでの生活状況を振り返ると同時に、キャンプが閉鎖するという情報を知り、ミャンマーへ帰るといった決断をした家族が多かった。
<p>ふりかえり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・IVYがバングラデシュのコックスバザール県にあるクトゥパロン難民キャンプで行っている水衛生の環境改善事業について紹介した。 ・ミャンマー避難民を取り巻く国際社会の動きについて説明した。 

3. 参加者アンケート

- ・有意義なワークショップでした。これからもたくさん機会を設けてほしいです。素晴らしい活動に拍手です。
- ・難民キャンプの過酷な生活条件と水と衛生の重要さがよくわかりました。
- ・日本は難民と接触する機会がほとんどありませんが、深く考えるきっかけになりました。
- ・講義形式ではなく、自ら体験できる設定を今後学校でも活用させていただき、生徒たちと考えていければと思います。
- ・助けてあげたい気持ちが強くなりました。

4. 担当者所感

【ファシリテーター：安達 三千代（認定NPO法人IVY）】

ワークショップ終了後の、私の最大の楽しみは、参加者の方々に書いていただいた「ふりかえりワークシート」を読ませていただくこと！特に今回は「難民について、もっと知りたいことはありましたか」という質問への回答が秀逸でした。「なぜバングラ政府は100万人近い難民を受け入れたのか、受け入れることができたのか」「彼らが何を大切にし、どういう選択を希望しているのか」「難民が選択した進路がどうなのか」・・・いつか、どこかで、私も、これらの難しい質問にその答えを見つけて話ができるよういそしみます。




第5分科会

「国際結婚 33 年、「移住」について考える～私の人生プラン～」

- 担当：西上紀江子（認定 NPO 法人 IVY 理事）、澤恩嬉（東北文教大学短期大学部准教授）
安孫子義彦（山形県国際交流協会）、栗野さとみ（山形県国際交流協会）
- 協力者：早森由香（金山町教育委員会）、三上幸（金山町在住 中国出身）、阿部シルリー（金山町在住 フィリピン出身）、五十嵐貞心（認定 NPO 法人 IVY 韓国語相談員）、小関アウグスタ秋江（AIRY 相談員 ブラジル出身）、吉川恵（認定 NPO 法人 IVY 中国語通訳）
- 分科会の目的：
 - ・1985 年、山形県朝日町で、全国に先駆けて行政主導の国際結婚が行われました。以来 33 年経つ今年は、結婚移民 1 世の方々とその町の担当者をゲストに迎え、外国出身者が、日本の地方で長く生活していくためには、どのような視点と取り組みが求められるのか、さらに、今後の人生プランについて考えます。
- 参加者人数：22 名

1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
報告	全国と比較した山形県内在住外国人の状況および金山町のデータを紹介する。
パネルトーク ファシリテーター： 西上紀江子	<p><u>ゲスト自己紹介</u> 外国出身者 5 名と、金山町教育委員会 1 名の自己紹介。</p> <p><u>Q どのような形で山形に住むことになったのか？</u> ・国際結婚をして、山形に住むことになった。</p> <p><u>Q 山形の好きなのところは？</u> ・山形の好きなのところは、温泉があり、自然豊かなところ。 ・道路を自転車で乗れるところ。自分の国より安全なところ。</p> <p><u>Q 今後山形に住み続ける？</u> ・まだ決めていない。 ・子どもが他県に行ったので近くで暮らしたい。 ・まだまだ山形に飽きていないので、飽きるまで住むつもり。</p> <p><u>参加者からの質問</u> <u>Q 現在自分は永住権を持っていて、子供がいるので日本に帰化をするか考えています。現在の在留資格はなんですか？ 今後山形に住み続けるにあたり、帰化しますか？</u> ・結婚してすぐ帰化した。 ・帰化は絶対しない、山形は好きだけど自分の国籍を残していく。 ・子供が大きくなって、もうそろそろ帰化してもいいかなと考えている。</p> 

	<p><u>Q 自分の国に置いてきたもの、または持ってきたものはありますか？</u> <u>そして、どんな決意をもって山形に移住しましたか？山形に来てから苦労されたことはな</u> <u>んですか？</u></p> <p>A. (ファシリテーター) 質問の内容が大きすぎるので、回答はグループトークにて質問を行うこととし、パネルト ークを終了。</p>
<p>グループトーク</p> <p>ファシリテーター： 澤恩嬉</p>	<p>※グループ5～6名×5グループ。 ※ゲストが各グループに入り、参加者はもっと話を聞きたいゲストのところへ移動。 ※各グループで司会・発表者を決める。</p> <p>【グループトーク 1】</p> <p>①グループ内で自己紹介。 ②前半の話を受けて、もっと聞きたいことをゲ ストに質問。</p> <p>【グループトーク 2】 今後の人生プランについて、意見交換。</p> <p>【全体共有】</p> <p>(Aグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからの人生設計：毎日楽しく生きる。 ・大きな決断をするとき、まずやってみる。 ・諦めかけたことをまたやる。 ・深く考えすぎずに行動する。 <p>(Bグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理想の人生＝異文化交流だととらえること、異文化交流で人生を豊かに ・日本人同士でも違うところがたくさんある。共通なところに着目してそれ以外は目をつ ぶる。 <p>(Cグループ) 同じグループに3組の国際結婚経験者がいて…。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夫婦、子どもと親、学校と親の間で、子育ての価値観が違う。解決はできないが、自分の アイデンティティを保ちつつ、他の価値観も受け入れることが生きていく上で大切。 <p>(Dグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことを実現するためには、何より健康が大事。 <p>(Eグループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際結婚によって数えきれない程の困難があったが、自分が好きな事を見失わず、自分 の決断を大切にしていきたい。 <p>(ファシリテーターより)</p> <p>現在は20～30年前と状況が異なり、ホームシックにかかる学生がいない。インターネット の普及により、毎日電話（ビデオトーク）ができる。“覚悟を決める”ことがすべてで はない時代になってきているかもしれない。「こうしたい」と思った時に、行動できる生き 方を目指していけたらいいですね。</p>



2. 参加者アンケート

- ・実際にお話しを聞くことで、当事者の方がどう感じてきたのか、そして現在どう感じているのかを知ることができた。当事者だけでなく、受け入れる私たちの側にもまだまだ課題があると感じた。
- ・沢山の人の今までの人生の中での出来事を聞いて、皆さんからのアドバイスをこれからの自分の人生に生かしていきたいと思った。
- ・山形にきて、山形で暮らす外国人女性の方の話を知ることができ、参考になった。日本と外国では子育て、暮らしなど様々な違いがありつらい経験もあったことがわかったが、それでもなお、日本で暮らす方々の話を聞き、自分の人生について考えることができた。
- ・実際に国外からいらっしゃった方のお話を聞くことによって、自分の国を出るということも選択の1つだなということがわかりました。そして国内外に関わらず毎日を楽しむことができるヒントをお話の中でいただけたり、それぞれの将来の夢を応援しあうことができ、希望も広がりました。ありがとうございました。

3. 担当者所感

【西上 紀江子（認定NPO法人IVY理事）】

- ・高校生や大学生が参加してくれたおかげで、場も議論も活性化した。
- ・国際結婚当事者が、出身国の文化や教育観と日本のそれらとの間で揺れ動き、どのように取舍選択したか、あるいは違いに苦しんだ挙げ句、どのように止揚・昇華させたかによって、個々人のあり方の多様性が生み出されていることを改めて感じた。
- ・後半のグループワークの時、グループ編成を参加者に任せるところ、移動せずそのままのメンバーになってしまったところが多かった。予め構成員の多様性に配慮したグループ編成をしておいた方がよかった。
- ・話したい人が多く、それ自体は良かったが、学生さんが司会をするのは難しかった。
- ・当初、「移住者のライフプラン」もしくは「自分のライフプランと移住」「移住者とのライフプラン」など、移住とライフプランの二つがテーマだったと思うが、結果的に「ライフプラン」のみに焦点が当たったように感じられる。企画チームで再度の検証をしてみたい。

【澤 恩嬉（東北文教大学短期大学部）】

- ・前半の協力者によるパネルトークのあと、各グループに分かれ自由に話す時間を設けたことで、全体では言いづらいことなど、深いところまで話をしてもらうことができ良かった。一方、ほかの当事者の話ももう少し聞いてみたかったという声もあり、協力者の方に移動していただくなどの工夫があっても良かったと思う。ただ、その場合、全体の時間をもう少し長く設定する必要がある。
- ・国際結婚がテーマということで、当初若い方の参加は少ないのではと思っていたが、幅広い年齢の方々に参加いただき、話題が広がって良かった。後半では参加者同士のライフプランを発表しあい、これまでの人生経験を踏まえ若い方々の今後の人生プランを後押しするような場面が見られたり、参加者の中に日本人の国際結婚当事者がいて悩みを共有したりなど、参加者個々人が自分のケースを話題にしやすい雰囲気づくりができたのではないと思う。
- ・最後のまとめを各グループからしていただいたが、まとめの時間が足りなかったことと一人（多くの場合高校生）に任せてしまったことで、全体で共有すべき内容を十分に共有できなかったことは反省すべき点である。グループ全体に見える形での記録の仕方などを工夫していきたい。





第6分科会

「山形発！私たち高校生が考えること、できること ～これからの世界を語ろう！～」

- 担当：阿部真理子（認定NPO法人IVY）、三澤香織（JICA山形デスク）
- 発表者：小松真緒／佐久間萌（山形県立新庄北高等学校）、石川美咲／山口未紗（九里学園高等学校）
長澤パティ明寿／若林恭佑、竹田彩乃／佐竹美咲（山形県立山形東高等学校）
- 分科会のねらい・目的：
 - ・県内の高校生が取り組む国際分野に関する取り組みを、他校の高校生及び一般の方に知っていただく機会とする。
 - ・県内の高校生が集い、自身が持つ意見を交換し合い交流する機会とする。
- 参加者人数：35人

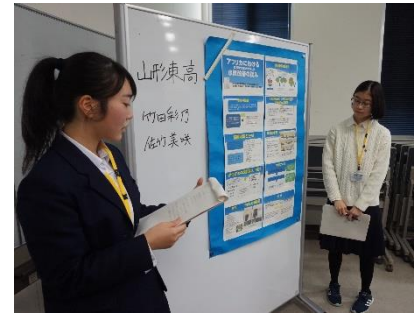
1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
<p>アイスブレイク 進行：青山登和氏 (山形東高等学校)</p>	<p>「共通点探し」 グループごとに共通点を探しあい、その個数を競った。 「山形市出身、食べるのが好き、兄弟がいる」など様々な共通点が挙がり、盛り上がった。</p> 
<p>ポスターセッション</p>	<p>ポスターセッション * 発表時間 10分（7分間の発表+3分間の質疑応答） * 参加者が各発表ブースを回り発表を聞き、黄色の付箋によかった点・感想を記入、青色の付箋に質問・疑問を記入し、ポスターに貼っていく。</p> <p>各ポスターセッションの概要 【発表者：長澤パティ明寿さん／若林恭佑さん（山形県立山形東高等学校）】</p> <p>* 「高校模擬国連」活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・模擬国連とは、国連会議などの国際会議を主に中・高・大学生などが運営も含めてシミュレーションする教育・サークル活動。 ・模擬国連を通して「国際問題への多角的考え・リサーチ力・交渉力…等々」が身に付く。 ・目標は高校模擬国連世界大会への出場と多くの人、特に県内の高校へ模擬国連の魅力を伝え、普及に貢献すること。そのために「校内模擬国連」や「CHALLENGE! 模擬国連 IN 山形」を開催する。 <p>* 「ユネスコ創造都市やまがたが結ぶ世界の絆」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像分野でのユネスコ創造都市ネットワークの交流を通して、山形市と他地域との相互理解や国際理解を深めたい。特に高校生同士の交流を通して、海外の都市間との交流を育み、ユネスコ創造都市山形の発展、世界平和のための対話の環境作りに寄与したい。 ・インドネシアパプア州との交流や、放課後上映会など計4回のイベントを企画実施した。 ・今後は、市民や高校生の国際交流や創造都市への関心を高め、当分野での若者の活動を発展させていきたい。 

【発表者：竹田彩乃さん／佐竹美咲さん（山形県立山形東高等学校）】

* 「アフリカにおける自然浄化能力を生かした水質改善の試み」

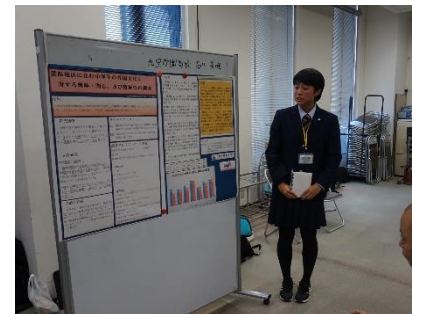
- ・ 清潔な水が手に入りにくいアフリカの課題を日本の技術を用いて改善したい。汚れた水によって健康被害にあっている貧困層にとって「低コスト」で「使いやすい」ことが大切。
- ・ 対象国をウガンダとし、ウガンダで手に入るものを用いて「ろ過機」を作成。ペットボトルの中に、下から布、燐炭、砂、砂利の順に入れ層を作り、上から水を入れ、ろ過した水が下から出る仕組み。
- ・ ろ過能力（汚れの除去）の実験検証を行い、下記の結果が得られた。
 - 層の隙間に細かい粒子が入ったことで、ろ過能力があがったため、回数を重ねるごとに水は澄んでいった。
 - 隙間が小さくなったことで水が通りにくくなり、水の出る速度が遅くなった。
- ・ 今後はろ過機能の向上、大腸菌の除去方法の検証、ろ過装置のマニュアル作成を予定。



【発表者：石川美咲さん（九里学園高等学校）】

* 「置賜地区に住む中学生の外国文化に対する興味・関心、及び積極性の調査」

- ・ 置賜地区のグローバル教育の現状を明らかにすることを目的に、置賜地区の中学生を対象にアンケート調査を実施した。対象：置賜地区の中学3年生 59名（市内34名、市外25名）。



（質問項目）

- ①外国のスポーツ選手やアーティストを知っている。
- ②海外に行きたい。
- ③具体的に行ってみたいところがある。
- ④将来、外国人と仕事がしたい。
- ⑤同年齢のアメリカ人と話せる程度に、自分も英語を話せるようになりたい。
- ⑥英語以外の外国語も勉強したい。
- ⑦外国の事を少しは知っていると思う。

（アンケート結果）

回答方法 1：はい、2：どちらかといえばはい、3：どちらかといえばいいえ、4：いいえ

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7
米沢	2.24	2.09	2.33	2.91	1.79	2.39	2.55
置賜	1.64	1.88	2.00	2.88	1.80	2.12	2.64

- ・ 質問1、2、3、5、6に関して前向きな回答が見られた。このことから置賜地区の中学生は外国文化への興味関心、積極性が比較的高いといえる。今後は、高校入学後の意識の変化を検証すること、また中学校教員への調査も必要と感じた。

【発表者：小松真緒さん／佐久間萌さん（山形県立新庄北高等学校）】

* 「多文化共生を考える～新庄国際化プロジェクト」

- ・ 新庄市は外国の方が少なく、多文化ではない？→海外の方を呼び込むことで新庄市の活性化につながるのではないかと→そのために新庄市と似ている所を調べる。
- ・ 群馬県大泉町を調査し「大泉町の取り組みを真似すれば、新庄も国際化するのか？」を検証。

- ・大泉町は産業の町であり、外国人労働者が増えた背景がある。
 - 大泉町の取り組み：ブラジル人向けの商店街、ポルトガル語の情報誌や防災マップ等々。
- ・新庄市在住外国人への新庄市に関するインタビュー：
 - 店が早く閉まる、漢字が難しい、新庄市を知らなかった等々⇒制度が整っておらず住みやすくない。
- ・外国の方がもっと住みやすくなるためには「制度（大泉町の取り組みを取り入れてみる）、気持ち（外国人を避けてしまう市民性を改善する）、PR/SNS（優しい日本語や英語を活用）」が大切。



【発表者：山口未紗さん（九里学園高等学校）】

- * 「米沢市の多文化共生を目指して」
- ・外国人にとって住みやすい米沢市を築くことを目的に、食事面、安全面で住みやすい市であるのかを明らかにするためアンケート調査を実施した。対象：山形大学工学部留学生9名。

(アンケート結果)

- ・食事面に関する質問の回答：
 - 飲食店にてメニューの英語表記及び写真と一緒に記載してほしい。材料がわからない、宗教による食事の取り方の違いに飲食店が対応することで、日本食にアクセスできるようにしてほしい。
 - 非常口を日本語以外でも表記してほしい。
- ・安全面に関する質問の回答：
 - 災害時は、避難場所や避難バックの準備の仕方、災害の種類などの情報がほしい。
 - 災害時はEメールや市のfacebook、テレビ、大学経由で情報を伝えてほしい。
 - ハザードマップを知らない外国人がほとんどであり、米沢市にハザードマップがあることは誰も知らなかった。
- ・アンケート結果から、飲食店のメニューの表記に苦労していること、日本食を味わいたいが、調理法や材料がわからないため、食べることができない現状、災害時は必要な情報を多言語で提供する必要、また伝達方法も検討する必要があることがわかった。
- ・今後は市内飲食店及び、市役所に問題提起を行い、アクションプランを共同で作成する。



全5グループの発表を聞き終えた後は、小グループで発表を受けての感想を共有。

ディスカッション

ディスカッションテーマ「持続可能な高校生の活動とするためには、どうしたらよいか」

ファシリテーター：

阿部真理子

小グループごとにテーマに基づいてディスカッションを行った（高校生同士のグループ、高校生以外のグループに分かれて実施）。

- ・先輩から次の世代（1年生）へ伝える。学年を超えた共同研究を行う。
- ・学校から地域へ活動の場を広げる。大学や他機関、JICA等と連携する。
- ・中学生の時から国際交流や国際理解に触れ、学ぶ。
- ・高校生が集まれる場や高校生同士を知る場を作る。



	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の発表のような取り組みを教員側も知り、経験することが大切。 ・「国際分野に興味がある人」の存在感を大きくしていく。
<p>ワークショップ体験</p> <p>ファシリテーター： 阿部真理子</p>	<p>ワークショップ「豊かさと開発」より</p> <p>・「豊かな社会にとって大切なこと」を各自カードから順位をつけて選び、その後グループごとに順位をつけた。豊かな社会ということで、選ぶカードがそれぞれ違うことを知り、求めるものが違うなかで豊かな社会を作っていくにはどうしたらよいかを考えるきっかけとなった。</p>



2. 使用した教材や参考資料

- ・ワークショップ「豊かさと開発」開発教育協会（DEAR 発行）

3. 参加者アンケート

- ・沢山の高校生と交流できてよかった。他の学校の研究を聞くことで、刺激を受けた。今後自分もそういうことをしていくので、参考にしていきたいと感じた。また他校生と話す場があってよかった。
- ・山形の高校生たちの発表を聞いて、とても刺激を受けた。普段話すことのない人たちと話すことができ、とてもいい経験になった。研究の方法がとても参考になった。
- ・様々な研究をしている高校生の話を聞いて、一方的に自分ができるところを考えるのではなく、活動が自分たちの地域にどのように還元されるのかまで、考えることが大切だと思った。視野を広げられてよかった。
- ・貴重なネットワークを広げられ、次の活動への大きなモチベーションにつながった。他校の高校生と意見を共有し、今自分の持っている課題へのアイデアを得られたことに大変満足している。ぜひ来年もよろしくお願いします。
- ・高校生の活発な姿に感動。高校生同士で意見・学校の情報を交換している場となっていた。非常に面白かったです。
- ・高校生の研究発表を聴くことができ今の学生さんたちのレベルの高さに驚きました。色々な年齢の人とも交流ができて大変有意義な時間でした。個人的には SDGs に興味があるので大変参考になりました。

4. 担当者所感

【ファシリテーター：阿部真理子（認定 NPO 法人 IVY）】

高校生がお互いの活動の発表を聞く、それも国際というジャンルの活動に限定しての発表だったわけだが、海外への関心が低くなっていると言われていたにも関わらず、これほどまでに多くの高校生が参加してくれたのは驚きだった。来年に向けて、参加する高校をどう選ぶか、参加者同士の交流をどのような形にするか、どんな話し合いを行ったらいかなど課題はあるが、来年も継続出来たらと思う。また、高校生だけの分科会がいいのか、高校生以外の人たちとの交流の場にするのがいいのか、一年かけて考えていきたい。

【ファシリテーター：三澤香織（JICA 山形デスク）】

高校生による分科会を今年度初めて企画実施を行った。各高校生からの内容及び発表は素晴らしく、参加者からも高い評価を得ていた。発表を行った高校生にとっても、自身の研究を一般の方に知っていただく機会となったこと、また発表を聞いた参加者より、様々なコメントやアドバイスを受け、今後の更なる研究へと続く意見や視点を得ることができたことも分科会の成果であると感じた。

高校生が研究や取り組みを続けていく上で、更なるリサーチやアクションの実現性を考えた際に、JICA や外部機関などの存在を知っていただき、活用いただくことが持続可能な活動にもつながっていくと感じる。今後もこういった機会の設営、研究に対する支援を各機関と連携し行っていきたい。



第7分科会

「世界がもし100人の村だったら ～山形から知る世界～」

●担当：チーム100人村：後藤優子、酒井悠里、島貫晶江、酒井森平（以上山形大学異文化交流コースOGOB）、
渡部詩織（山形大学4年）、三上英司（山形大学地域教育文化学部教授）

●分科会のねらい・目的：

・ワークを通して体感した内容が、山形だけの問題ではなく、実は世界で起きている問題と共通点があることを知ってもらおう。

●参加者人数：32名

1. 分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
<p>アイスブレイク</p> <p>ファシリテーター： 後藤 優子 渡部 詩織</p>	<p><u>入村手続き</u></p> <p>役割カードの配布</p> <p><u>じゃんけんハイタッチ</u></p> <p>緊張感をほぐすため、出会った人とじゃんけんをして、あいこの場合はハイタッチ、勝敗が付いたら握手をする。</p> <p><u>山形を知ろう！「グループ対抗日本一クイズ」</u></p> <p>山形が誇る日本一のもの当てクイズ。「食べ物編」「食べ物以外編」を行った。</p> <p><u>山形を知ろう！「友好都市はどこでしょう」</u></p> <p>山形県や県内市町村が世界のどの地域と友好都市になっているのか、またそのきっかけは何なのかを知ってもらうためクイズを行った。市町村の友好都市については、「私と友好都市なのは山形県内のどこか。」という形式でクイズを行い、山形県の白地図の該当する市町村の場所を塗りつぶし、市町村名を書き込んでもらった。</p> <p>《主な友好都市》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山形県：アメリカコロラド州、中国黒龍江省、インドネシアパプア州 ・天童市：イタリアマロスティカ州（人間将棋、人間チェスを行っていることから） ・寒河江市：トルコギレスン市（トルコがサクランボの発祥の地とされていることから） ・米沢市：ブラジルタウバテ市（米沢市内の企業が工場進出したことから） <p><u>山形を知ろう！「山形県の貿易クイズ」</u></p> <p>山形県の貿易に関するクイズを3問出題し、輸出と輸入どちらが多いか、輸入額が多い国はどこか、山形県で生産された製品で、海外でも高い評価を受けたものは何か考えてもらった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・輸出と輸入で多い方：輸入（輸出額の約3倍） ・輸入額が多い国：中国、ドイツ、スペイン ・海外でも高い評価を受けたもの：山形県で伐採された木材を加工した木のおもちゃ
<p>ワーク1</p>	<p><u>山形県の人口</u></p> <p>山形県の人口を参加者に予想してもらった後、正解（2018年8月現在約110万人）を発表。</p>



<p>ファシリテーター： 酒井 森平</p>	<p><u>山形県内の年齢別人口比率</u></p> <p>参加者に配布した役割カード①に記載してある区分（子ども・大人・お年寄り）で分かれ、それぞれ1列に並んだ。この列が2015年現在の山形県の年齢別人口比率を表していることを発表。その後下記に従って列の人数を移動。</p> <p>① 2015年の比率／子ども13%：大人58%：お年寄り29%</p> <p>② 2025年の比率／子ども12%：大人53%：お年寄り35%（人口：100万人）</p> <p>③ 2040年の比率／子ども6%：大人49%：お年寄り45%（人口：80万人）</p> <p>上記のように、人口は減少し続けるであろうこと、お年寄りが増えて子どもは減っていくことを体感した。</p>
<p>ワーク2</p> <p>ファシリテーター： 酒井 悠里</p>	<p><u>山形県内の4地域の人口…①</u></p> <p>役割カードの記載に基づき参加者を、県内4地区を表す紐の中（村山：黄、置賜：緑、最上：青、庄内：赤）に入ってもらった。</p> <p><u>山形県内の人口移動…②（①の状態から移動）</u></p> <p>参加者が入っている紐（地域）を生まれた場所とし、別の地域に移動する人がどのぐらいいるかを、実際に移動して体感した。結果は下記の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最上からの移動が最も多く、その分村山の人口が増加。 ・置賜、庄内は人数の移動はあったものの、大きな増減はなし。 ・紐の中に残った人数は、村山、庄内、置賜、最上の順で多く、かつこの人数が現在の各地域の人口比率を表している。 ・県内では山形市がある村山地域に人が集まっている。 <p><u>山形県外への人口移動…③（②の状態から移動）</u></p> <p>役割カードに記号の記載がある参加者に、入っている県内の4地域の紐とは別の紐（県外を表す）へ移動してもらった。その移動者が1年間の県外への転出者の割合を示すことを紹介するとともに、転出者の紐の中にいる人のうち数名に元の地域へ戻ってもらい、県外からの転入者の割合も示した。</p> <p>また、次のことを紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山形県は毎年、転出者が転入者より約4,000人多いため人口が年々減少している。 ・転出者の多くは都市部へ移動している。 ・このような転出入の状況は山形県に限らず、多くの都道府県で見られることで、各地域の中心都市へ人口が移動する傾向がある。例えば、東北地方でみると宮城県、東日本でみると東京都に他県等から人が集まっており、逆に、その他の地域では人口が減少している。
<p>ワーク3</p> <p>ファシリテーター： 島貫 晶江</p>	<p><u>山形県の外国人人口</u></p> <p>山形県の在住外国人人口の推移を示す表を掲示。</p> <p>4年前と比較して、山形県に在住する人が3倍以上になっている国名が空欄となっており、その国がどこか参加者に考えてもらった。</p> <p>答えは「ベトナム」であり、正解する参加者もみられた。</p>



	<p><u>ベトナムの人口</u></p> <p>山形県内の外国人人口のうち、ベトナム出身者が急増していることから、ベトナムについて掘り下げるために、まずはベトナムの人口を紹介した。また、役割カードの記号で参加者に3つのグループに分かれてもらい、何のグループに分かれたのか予想してもらった。答えは、ベトナムの子ども、大人、お年寄りの割合に沿ったグループであり、参加者は、ワーク1で体験した山形県の年齢別の人口に比べて、子どもの人数が多いことに驚いていた。</p> <p><u>ベトナムの地域と人口移動</u></p> <p>役割カードに書かれた数字をもとに、均等な人数の6つのグループ（ベトナムの6地域を示すグループ）別に参加者に分かれてもらった。その後、ベトナムの各地域の人口を紹介するとともに、各グループに写真入りのボードを配布し、そのボードに書かれた地域の特色を地域グループごとに発表した。地域の特徴をつかんだところで、各地域グループから数名ずつ他のグループに移動してもらい、地域間の人口移動を体感した。また、特に移動する人が多かった地域について、なぜその地域に移動する人が多いのかをグループごとに考えてもらった。その結果、参加者からは都市部や工業が盛んな地域に仕事を求めて移動する人が多いのではないかという意見などが出された。</p>
<p>ふりかえり</p> <p>ファシリテーター： 後藤 優子</p>	<p><u>今日の感想</u></p> <p>参加者数名に、ワークショップを通しての感想や、初めて知ったこと、気付いたことを自由に話してもらい、その内容のトピック担当者にもコメントしてもらった。</p> <p><u>山形とベトナムの共通点、異なる点を話してみよう</u></p> <p>ワークショップを通して、山形とベトナムの共通点はあるか、あったとすれば何か、また山形とベトナムで異なる点はあるかを参加者に自由に発表してもらった。</p> <p>参加者から出された主な内容は次のとおり。</p> <p>(共通点) 山形県もベトナムも米づくりがさかん、一方、山形県でも農業以外の仕事に就いている人が多く、ベトナムでも農業の就業者数は減少傾向にある。</p> <p>(違い) 山形県では県庁所在地の山形市の人口が最も多いが、ベトナムは首都のハノイよりもホーチミンの人口が多い。</p> <p><u>日本人がベトナムに行く目的・ベトナム人が日本に来る目的</u></p> <p>ベトナムに行ったことがあるファシリテーターにインタビューし、日本人がベトナムを訪れる主な目的が「観光」であることを確認した後、ベトナムをテーマにしたワークショップをふりかえり、ベトナム人が日本を訪れる主な目的を考えてもらった。山形県にいるベトナム人は「技能実習生」が多いことから、「技能実習生」について、何か見聞きしたことがあるか、あればどのような内容かを数名に質問した後、グループごとに外国人を迎える側として自分たちには何ができるのかを考えてもらい、発表を行った。</p>

2. 使用した教材や参考資料

- ・ 山形県ホームページ

… 『山形県の国際化の現状』(2016年3月) 山形県商工労働観光部観光経済交流局経済交流課国際室

<https://www.pref.yamagata.jp/sangyo/kokusai/plan/6110015kokusai/kanogenjyo.html>

… 「山形県貿易実態調査の結果について」

<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kanko/110016/bouekijittaichousa.html>

…「平成 29 年 山形県の人口と世帯数について」

https://www.pref.yamagata.jp/ou/kikakushinko/020052/tokei/jinko_H23nenpo.html

…「山形県の人口と世帯数（推計）（平成 30 年 8 月 1 日現在）」

<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kikakushinko/020052/data/jink/H30jinkogepo/30.08.pdf>

- ・山形市ホームページ『山形市の姉妹・友好都市について』

<http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp/kakuka/somu/kokusai/sogo/sistercity/sistercity7.html>

- ・天童市ホームページ『天童市 友好・姉妹都市』

<http://www.city.tendo.yamagata.jp/municipal/syokai/simaiyuukoutosi.html>

- ・寒河江市ホームページ『寒河江市 友好姉妹都市』

<https://www.city.sagae.yamagata.jp/sagae/yukoshimaitoshi.html>

- ・山形県国際交流協会ホームページ <https://www.airyamagata.org/>

- ・外務省ホームページ「ベトナム社会主義共和国」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/index.html>

- ・JETRO ホームページ「調査レポート（ベトナム）」<https://www.jetro.go.jp/reportstop/reports/asia/vn/>

- ・株式会社国際協力銀行ホームページ『ベトナムの投資環境』（2017 年 8 月）

<https://www.jbic.go.jp/ja/information/investment/inv-vietnam201708.html>

- ・『現代ベトナムにおける人口移動の要因と地域間格差』

<http://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/6398/1/keizai279-11.pdf>

- ・VIETJO ベトジョーベトナムニュース https://www.viet-jo.com/home/province_list.php

3. 参加者アンケート

- ・山形やベトナムの人口移動の様子を小さなスケールでわかりやすく知ることができました。山形県では一度他県にいった人でも意外と戻ってきているのだなと思いました。色々な人と話し合っって色々な考えが聞けて楽しかったです。
- ・実際に動いて目で人口の動きなどがわかってとてもわかりやすかった。同じように他の国についても知りたいと思った。
- ・ローカル、グローバル、グローバルな視点に立って経済や人口の行方を体験的に考えることができ楽しかった。
- ・人口や世代別など普段、数字でしか見ることのできなかつたデータを、人の移動で表すことで、身近に感じることができてよかった。山形県の地元の様子を考えると同じ尺度でベトナムについて捉えることができたのでよかった。

4. 担当者所感

【ファシリテーター：後藤優子（チーム 100 人村）】

昨年度に引き続き、100 人村（山形版）をさせていただきました。今回は世界の国々の中からベトナムに注目したトピックを追加しましたが、クイズやワークを通して、山形の現状や未来、世界とのつながりを体感していただけたのではないかと思います。ベトナムに注目した分、世界全体を取り上げることができなかつたので、今後は更に各トピックに世界のことを盛り込めるよう改善していきたいです。ご参加いただいた皆様には活発に意見を出していただき感謝しています。



ランチセッション

「見た・感じた・考えた 多民族国家ラオス～JICA エッセイコンテスト 2017 研修報告～」

●発表者：長澤パティ明寿（山形県立山形東高等学校 2 年）

●2017 年度の JICA 国際協力エッセイコンテストにて長澤パティ明寿さんが「審査員特別賞」を受賞しました。

長澤さんを含む高校生の受賞者 9 名は、副賞として夏休みの期間を利用し、ラオスの国際協力の現場を視察する海外研修に参加しました。その研修を通して感じたこと・考えたことを、ランチセッションにて報告しました。

<p>ラオスでの訪問場所</p>	<p><u>ビエンチャン</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ JICA ラオス事務所 ・ 在ラオス日本国大使館 ・ ラオス日本センター ・ ホームステイ ・ パトゥーサイ ・ タラートサオ ・ 托鉢体験   <p style="text-align: center;">ラオスでの研修の様子</p> <p><u>ルアンパバーン</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 托鉢見学 ・ 青年同盟（青年海外協力隊英語教師隊員現場視察） ・ UXO（不発弾） Lao ビジターセンター ・ ワット・シェントン ・ 伝統芸術民族センター ・ プーシーの丘 ・ ナイトマーケット
<p>所感</p>	<p><u>研修を通して</u></p> <p>・私は多民族国家、ラオスという視点を持ち今回の研修に臨んだ。「私たちはラオスが49の民族全てによって形作られていると考えている。そのため、植民地時代に強制的に戦いをさせられた時以外に争いはなかった。国も平等に権利を与えてくれている。」ルアンパバーン伝統芸術民族センター職員・カム族出身の方の言葉だ。</p> <p>多文化共生のため世界で共有すべき大切な価値観がラオスにあると強く感じた。この言葉を胸に留め、世界で文化間対話を促進し、文化多様性を活かした持続的な世界平和創造に寄与できるよう、これからもアンテナを高く張って挑戦・活動し続けていきたい。</p> <p>・人々の間に流れるゆったりとした時間。豊かな自然とメコン川の雄大な流れ。笑顔でサバイディーと挨拶を返してくれる人々。忘れることができないカオニャオやラープの美味しさ。私は一週間の研修を通してラオスという国の大ファンになった。ぜひ皆さんにも一度ラオスを訪れて頂きたい。</p> <p><u>発表を通して</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ラオスで学んだ・感じた・考えたことをまとめ、発表する過程で自分が現地で何を思ったのかを言語化して整理し、参加者の方からのご質問に答えることでさらに深めることが出来た。 ・今回、同世代の高校生に発表を聞いてもらうことが出来、大変嬉しかった。ラオスにて刺激的で充実した時間を過ごすことが出来たように、一編の作文を綴ることで広がる自分の視野、世界、可能性は無限であると感じた。国際協力、国際交流に対する素直な自分の考えを表現し、JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募することを中高生に強くお勧めする。 <p><u>今後</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後も、体感した貴重な経験を自分の中だけで留めずに様々な場で発信し、多くの人と共有することで多角的な視点から物事を掘り下げていきたいと思う。 ・結びに、ラオス研修について報告する貴重な場を頂けたこと、JICA 山形デスクの三澤さんはじめ関係者の方々に心より御礼申し上げます。コープチャイライライ。 

JICA国際協力エッセイコンテスト2017 審査員特別賞 受賞作品

山形県立山形東高等学校1年 長澤パティ明寿「強い信念」

「協力隊として途上国に住み活動する。これは決して楽しい事だけでは無いが多くを学ぶことができる。」
「ただ技術を教えるのではなく一緒に創っていく事が大切なんだ。」この夏、父の母国であるネパールを訪問し、現役の青年海外協力隊員として活動されている方にお話を伺う機会があった。これはその際にお聞きした言葉だ。JICAが青年海外協力隊を派遣して今年で52年。一人一人の強い思い、信念、そして地道な努力の結晶が世界をどれだけ動かしてきただろうか。

私には目標がある。将来、世界で異文化理解教育を推進し、文化・教育という観点から世界平和に寄与する事だ。昨年から始まった国際社会の取り組みSDGs（持続可能な開発目標）で言えば、目標4-7にある「文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育」や目標16「平和と公正をすべての人に」に関わってくるだろう。なぜ私がこのような目標を抱いたのか。その1番大きな理由は、ネパール人の父と日本人の母を持った事であると思う。幼い頃から異文化にふれ、考える機会が多かった。もちろん、異文化にふれてびっくりする事や、あり得ない、信じられないと思う事も多々あった。例えばネパールの道路。なんと、大通りにも関わらず優雅に牛が寝そべっていたのだ。しかし誰も牛をどかさそうとはしない。むしろ、車や人が牛をよけていたのだ。私はこの光景にとても驚いた。父に訳を尋ねると、これはヒンドゥー教の考え方によるものだ。ヒンドゥー教徒にとって牛は昔から自分達の生活を支え、豊かにしてくれるものであり、信仰の対象であるそうだ。違いを学ぶ事で、多様な価値観を理解できる。異文化を学ぶ事、感じる事は私にとってとても興味深い事なのだ。

今の世界、文化が争いや対立の火種に利用されてしまっているように感じる。だが文化は本来、私がそうであったように、人々の心を引きつけ感銘を与えるものではないだろうか。もちろん、異文化を完全に理解し、認め合い、受け入れる事は難しい。しかし、他者の文化について深く知らないのに勝手なイメージだけで他者の事を決めつけてしまうのではなく、まずは他者の文化について深く知り、感じるべきだ。そうする事で他者の文化の価値観、真の姿が見えてくる。そしてこれが世界の多様性を理解し、自分の文化を改めて大切にしようとする事へとつながる。グローバル化がさらに加速していくこれからの国際社会において、世界の人々が共に生きるための大きなキーポイントになると考える。私はその事を、考え方の基礎がつくられる幼い頃からの教育を通して世界に広げていきたい。

私は今、その目標への第一歩としてJICA等の様々なイベントやセミナーに参加して、世界の文化にふれると共に、自分のホームタウンである山形についても学んでいる。そのような身近な1つ1つの体験、経験がこれから、私の活動の血となり肉となっていくだろう。身近な所にチャンスはたくさんある。そのチャンスを掴み、道を切り開いていきたい。

私がこれから進みたいと考えている国際協力の分野。おそらくこれは一筋縄ではいかない。しかしどんな時でも強い信念の基、現地の人々と共に活動していきたい。時に現実と自分の理想の狭間で迷い、悩み、壁にぶつかる事もたくさんあるだろう。でもそこが踏ん張りどころ。考え、会話し、現実を受け止めながらも理想にむかって走り続けていきたい。自分が世界を変える一人になるのだ。この強い気持ちを忘れずに。



アンケート集計結果

一般参加者 133 人中 119 人提出・回収率 89%

※各分科会に関するアンケートは、各分科会のページ内に記載しております。

1. あなたのご所属等について教えてください

- 教職員…12 学生…15 国際協力・交流団体…9 公務員…2 民間企業…11
 中学生・高校生…60 NGO 関係者…0 その他…10

2. このフォーラムをどのようにお知りになりましたか？

- リーフレット…48（どこで：学校・大学、AIRY 等） 知人からの紹介…23
 ホームページ…12（どこの：AIRY） Facebook…4 メールングリスト…2
 ダイレクトメール…6 その他…26（先生からの勧め、学校や大学の掲示板等、山形新聞等）

3. 今回のフォーラムは何回目のご参加ですか？

- 初めて…95 2回目…13 3回目…2 それ以上…9（4、5、6、7回目等）

～皆様のご参加ありがとうございました 関係者一同～